

## 第2回 丹波市災害ボランティア派遣

10月5日、2回目の丹波市災害ボランティア派遣に行ってきました。午前4時30分に三小牛キャンパスを出発。現地には午前8時45分に到着しました。この日の作業は豪雨により土砂が流れ込んだ民家の床下、納屋および庭の泥だし作業。床下の泥については、これまで入ってくれたボランティアがほとんど取り除いてくれました。しかし、奥の奥、一番手が届かないところにはまだ泥が残っていました。学生たちは床を這い、奥までもぐりこんで泥を掻き出していました。現地の方によれば、家屋の復旧作業に関しては、ニーズの9割が片付いたとのこと。しかしそれは未だ1割が残されたままだということを意味します。そして、この1割が見えにくい。災害発生からまもなく2か月が経過しようとする中、社会的関心も薄らいでいきます。時間の経過とともに被災された方も声をあげにくくなっており、そのことが余計に気づきにくい状況を生み出しています。

午前9時から午後3時半まで学生18名、教員1名の計19名で活動し、家の床下、納屋、庭の泥の大部分を片付けることができました。家主さんが「途方に暮れていた。それだけに、ここまで片付けてもらえるとは思ってもみなかった」と感激されていたのが印象に残っています。われわれ自身も山のように積もった土砂を前に、1日でどこまでできるのか不安もありました。一人や二人ではめげてしまいそうな量の土砂も、仲間がいれば確実に前進するものです。当日は台風18号の影響から雨の中での作業を覚悟して丹波に入りましたが、作業終了まで1度も雨が降ることもなく、涼しい中で作業をすることができたことも、作業効率を押し上げた要因の一つです。

今回の派遣は、大学コンソーシアム石川大学間連携共同教育推進事業の一部として実施しました。そのため、北陸学院大学のみならず、金沢大学、金沢星稜大学、金沢学院短期大学から、医薬保健、法学、経済、食物栄養、教育、理工、地域創造、幼児児童教育などさまざまな学部の1年生から修士課程2年までの学生が参加してくれました。今回のような混成チームによる活動は、異なる視点や価値観に触れるまたとない機会であり、被災地の力になるという本来の目的プラスアルファの人間成長の機会にもなったのではないのでしょうか。

